

ケアポート板橋 特養2階

症 例 概 要 利用者：90代 女性 要介護度4

病名：認知症、高血圧症、網膜中心動脈閉塞

利用サービス：ケアポート板橋 特養2階（入所 R2年3月14日～現在）

経過：令和2年3月に入所。他利用者さんとも関係は良好で、身の回りの事や食器の片付け等の手伝いを進んでされておりました。令和2年の9月、「網膜中心動脈閉塞」にて右眼の視力が消失。左眼も著しい視力低下から、悲観的な発言や生活意欲の低下が顕著となる。「このまま目が見えなくなる前に、実家に帰りたい。妹に逢いたい」。その言葉を実現すべく、コロナ禍、多職種と連携を行い実現。生きる気力や笑顔を取り戻すことができた事例。

内 容

積極的な性格、他人を思いやり、活動や職員の手伝いを行って下さっておりましたが、令和2年9月、起床した際に「真っ暗で何も見えない」とご本人より訴えがあり受診。「網膜中心動脈閉塞」の診断を受け、著しい視力低下が見られました。Drからも「回復は難しい」との見解で、居室に引きこもることが多くなり、「私は目が見えないから何もできない。もう死にたい」と悲観的な発言が増えていきました。お好きだったカラオケにも「字も見えないからやりたくない」と仰ることもあり、他利用者さんが励ましの言葉をかけた時には「あなたに私の気持ちが分かるか!」と、感情の表出も乱れる様子が見られた事もありました。その中で「家族に逢いたい」「妹に逢いたい」と涙される事が常となりました。

「実家で家族に逢いたい」という思いをどうしたら実現させられるか、またそれが生きる糧になって欲しいと、ご家族へご本人の意向と現状を伝えました。ご家族も快く了承して頂け、「せっかく来れるのであれば、お墓参りも行わせてあげたい」とのニーズも叶えるために、話し合いを重ねました。体調観察票を当日会うご家族の人数分を送付し、外出日から換算し2週間以内の体調、検温、外出の有無をご協力頂きます。また、当日の感染対策として、看護師から助言である、マスク・フェイスシールドの着用、水分は持参する事、ご本人が触れる所は、付き添いの職員がアルコール消毒をする等、直接・間接の接触を最小限にし、感染対策に努めました。

道中も体調が悪くなる事はなく、実家に着き、ご家族の姿を見て「みんなに逢いたかった。今日ここに来て本当に良かった」と仰り涙されておりました。ご家族からも、「もう2度と実家には来れないと思っていた」、妹様に関しては「お互い死ぬまで会えないと思っていました。今回の機会をありがとうございます」

とお言葉を頂きました。お墓参りでは、お墓の手入れや仏花を活ける笑顔のご本人の姿がありました。帰りの車内、「今日は楽しかった。どうもありがとう。また連れてってね」と1日を笑顔で終えました。また、「地元に来たから、瓜の漬物が食べたい」とのことで、途中道の駅に寄り、生き生きした姿をされておりました。

後日、ご家族と妹様からお礼の電話を頂きました。「今回に限らず、皆様が宜しければ定期的に実家へ帰る機会を作らせていただければ。本人もこんなに喜んでくれるし、私たちも嬉しいです」と仰って頂きました。

「死にたい」等の悲観的な言動は、この外出をきっかけに聞かれなくなりました。

「千葉にまた行きたいね。あの時、連れてってくれてありがとう」

「次に行った時は、カシワヤの最中の店に行こう。皆にお土産もね」と他者を気遣われる言動もあり下膳の手伝い等、「これくらい見えるからできるよ」と以前のご本人に戻っておられます。視力低下してから「こんなみすぼらしい姿で外に出たくない」と仰っておりましたが、お散歩や階段のリハビリも行って頂けるようになりました。

今回、コロナ渦においてもご本人の希望を最大限叶え、それがご本人の生きる活力になった事、ご家族や他職員の協力もあって実現できたことが今回の症例でフロアにおいても学びに繋がりました。コロナを理由にご利用者の「やりたい事」を制限せず、今だからこそ行える事をフロアで検討し、利用者さんの日々の生活が豊かになることを願い、支援して参ります。

今回の内容、また他職員の模範となる取り組みとして、チームケアが実現できたこの症例はキラキラ介護賞に相応すると考え、推薦させていただきます。